

日 時	令和4年7月14日(木)
視 察 先 1	愛知県豊田市足助「おいでん・さんそんセンター」
研修テーマ（視察項目）	移住・定住対策の取組状況と課題について
<p>① 取組の経緯・内容など</p> <p>豊田市は、平成の合併により過疎地域を含む広大な都市となった。集中的な過疎対策にも関わらず人口減少に歯止めがかからないことから、2013年8月、都市と山村の支えあいをコーディネートする中間支援組織「おいでん・さんそんセンター」を設立した。そこをプラットフォームとして住民、企業、団体、NPO、研究者などが集い、専門性を生かしながら市民主導の取組みを迅速、柔軟に展開している。</p> <p>都市と山村をつなぐ支援として、耕作放棄地に悩む山村部の集落と農業を通じた若手社員の人材育成を狙う都市部企業のコーディネートを始めとする企業と山村地域のマッチング支援、研修・体験・CSR事業のコーディネート、山村でのソーシャルビジネスへの助言等を実施している。また、移住定住を総合的に支援するいなか暮らし総合窓口も開設している。このような都市と山村を「つなぐ」中間支援は、低コストで、都市と山村双方の課題を同時に解決し、過疎の問題を山村固有の問題とせず、都市住民と共に解決する仕組みづくりに工夫を凝らしている。</p> <p>② 今後の課題など</p> <p>山林の多い地域で、手入れの必要な森林は多い。半農半林などの取組はある程度効果を上げているようだが、間伐など森林のメンテへの人手不足は否めないようだ。</p> <p>③ 本市に反映できると思われる点</p> <p>行政でなく一般社団法人としての活動はスピード感をもって様々な取組が可能となっている。わが市でも取り入れていくべきと思う。また、都市と山村の共生を目的とした「山村条例」を起草・施行している。大いに有意義な取組と思う。</p> <p>個別の点では①「半農半X企業サポート」という、儲けるための農業ではなく、自身が食べていくための農業を、別の何かと組み合わせたライフスタイルを後押しする取組み、②移住希望者と地域の有力者との面談を行い、よりよいマッチングを目指す取組み、③古民家改築だけでなく「2戸2戸(ニコニコ)作戦」という小規模宅地分譲も含めて移住の受け皿を増やす取組み、④空き家の片づけに補助金を出す取組み、などについては本市でも取り組むべき施策と感じた。</p> <p>④ その他（感想、意見）</p> <p>トヨタ自動車のおひぎ元ではあるが、トヨタの息がかかった成功事例というわけではないのは意外であった。ただし豊田市自体の財政事情がいいので本事業にはある程度潤沢な予算がついているということであり、本市で取り組むためには工夫が必要である。</p> <p>「おいでん・さんそんセンター」の取組は多岐にわたっていて、ともすると総花的な印象は否めないが、一つの公社のもとで様々な人が関わり合うことで気づきやひらめきが生じる環境が作られているようにも感じる。多くの人を巻き込むムーブメントとしての役割も大きいものと思われる。</p>	

日 時	令和4年7月15日(金)・16日(土)
視 察 先 2	徳島県神山町産業観光課、「(一社) 神山つなぐ公社」、他
研修テーマ (視察項目)	移住定住対策の取組状況と課題について
<p>① 取組の経緯・内容など</p> <p>神山町では平成27年に持続可能なまちづくりを目指す創生戦略「まちを将来世代につなぐプロジェクト」を策定した。町内の人口は現在約5,300人であり、Iターンによる移住者が多いことから、全国的には注目されているが、それでも人口の自然減少は止められていない。人口の減少は避けることはできないが、2060年時点で3,000人を下回らない人口を維持し、かつ小中校の各学級人数が20名以上を保つ均衡状態に入ることを目指す戦略である。その戦略の実現のために、平成28年4月に設立されたのが「一般社団法人神山つなぐ公社(以下:つなぐ公社)」である。「町をつないでいくために望ましい状況」を実現するために①すまいづくり、②ひとづくり、③しごとづくり、④循環の仕組みづくり、⑤安心な暮らしづくり、⑥関係づくり、⑦見える化、の7つの施策領域を設け、多角的に多くのことに取組んでいる。様々な取組で、単発では得られない複合的な効果を上げている。一般社団法人であることでフットワーク・スピード感で時宜に適した施策が取れるとともに、県立高校の改革では教育委員会など県所轄の課題にも切り込んでいったというメリットがある。</p> <p>本視察では1日目はこのプロジェクトのきっかけとなったアート・インレジデンスの作品群を鑑賞するために大栗山を訪問し、その後「つなぐ公社」の馬場代表理事からプロジェクトの概説を伺った。2日目は地元の木材を用いた(移住者用)集合住宅を視察し、地産地食に取組む「フードハブ・プロジェクト」の樋口氏から農場にてプロジェクトの概要・現状を伺った。この後、フードハブ・プロジェクトの一環で地産品をメニューとするレストラン「かま屋」で昼食をとった。</p> <p>⑤ 今後の課題など</p> <p>上記「集合住宅」は地元の材料、地元の建築業を採用するという大変素晴らしい取組であるが、家賃収入に対し建築コストのものは取れないということである。現在は過疎債でバランスしているというが、今後も住宅を新築していく必要があるとすれば持続可能性という意味では問題が残っている。ワークインレジデンスがきっかけとなってビストロ、カフェ、パン屋、靴屋など多くの店舗が開業しているが、地元の人口に対して過大な店舗数に感じられる。現在は物珍しさから他市町からの来客で維持されているものと思われるが、ブームを持続できるかは疑問が残る。</p> <p>⑥ 本市に反映できると思われる点</p> <p>「一般社団法人」としての取組はスピード感が全然違う。本市でもぜひ中山間地域を持続させるための社団法人を設立したい。同じく、古民家だけでない移住先の住宅づくりについても取り入れるべき点がある。</p> <p>「つなぐプロジェクト」は上位概念「つなぐ」の実現のために7つの領域分野を取り上げ、総合的な視点から施策を構築した。「ワーキンググループ:28名/49歳以下/公民半々/男女半々/移住者半分」による検討の結果である。将来の自分に関わることとして、こうしたプロジェクトチームを組む取組を本市にも望みたい。</p> <p>上記施策領域から「しごとづくり」としてのワークインレジデンス、「循環の仕組みづくり」としてのフードハブ・プロジェクトも大いに参考にして本市でも取り組みを考えていきたい。</p>	

⑦ その他（感想、意見）

説明して下さった馬場代表理事、樋口氏から強い意気込みとバイタリティを感じた。また同時にお二方とも高い見識を備えた人物であることも感じ取れた。馬場代表理事が「実行する熱意と力のある人が明確に存在することが大切」とおっしゃっていたように、7つの施策領域の①は「ひとづくり」であり、神山の成功は「ひとづくり」の成功に負っているところが大きいと思う。

視察に当たり神山町の成功を予習する中で、NPO グリーンバレー(神山町でアーティスト・イン・レジデンスや神山塾、サテライト・オフィス誘致など、移住支援を軸とした事業を主に手がけている非営利活動法人)を主宰し、「つなぐプロジェクト」立ち上げにも貢献した大南信也氏という方がいらっしゃって、神山のプロジェクト(の成功)はこの方のカリスマによってもたらされたものと半ば思い込んでいたが、いろいろと話を伺うと、もちろん貢献は大きいものの、お一人のカリスマで成り立つという話ではなかった。魅力があるプロジェクトに、適材適所に人材が集まってきたということであろう。

また、複数のキーパーソンが首都圏にパイプを持っていて、レストラン関係に農作物の販路が開けたり、首都圏のレストランの外国人シェフを神山に招聘したりしていたことが興味深かった。地産地食でさばききれない部分を一足飛びに東京の広大な市場に出せるというところは、うまくできているというか幸運だと思う。

神山高校の再生に関する書籍も読んだが、存続の危機にある農業高校の分校を立て直す物語は感動的であった。高校/教育委員会だけの問題でなく「つなぐプロジェクト」が既存の枠組みを超えて多方面から知恵を出し合って成し遂げたことが素晴らしいと感じた。この高校再生の話に代表されるように「つなぐプロジェクト」は様々な分野をまたぐ取組で、単発では得られない複合的な効果を上げているところに成功の鍵がある。これぞ「シナジー」だと感じた。

アーティスト・イン・レジデンスをはじめたことで「よそものに対する警戒感/偏見」が少なくなっただけで移住者を温かく受け入れる土壌ができた、という話を最初にきいたが、四国はお遍路さんを受け入れる習慣ももともとあったのだ、という説も聞いた。「おいでん・さんそんセンター」でも移住者を地元の人(有力者)と面談をしてスムーズな受け入れ態勢をとれるようになっていくという話があった。一般論として移住してきても定住する人は存外少ないという話もよく聞く。移住促進にあたっては移住者をいかに長く住みやすいように受け入れるか、ということについても大いに検討する価値があると思う。

神山町には今回の報告のほかにも多くのすぐれた取組があり、まだまだ視察したい箇所があったが2日間では見きれず残念だった。